

## 「どこへ行くのか」の分節音及び 韻律的特徴の分布に関する一考察

—— 福岡県グロットグラム調査から ——

Regional distribution of segmental phone and prosody on the  
sentence "Where are you going?" in Fukuoka prefecture

杉 村 孝 夫

(1998年9月10日 受理)

【キーワード】 福岡県方言, 地域差, 世代差, 性差, 疑問文, 敬語, 中間方言, アスペクト, 文末助詞, イントネーション

【要旨】 下関～荒尾間方言グロットグラム調査の一項目である「どこへ行くのか」の分節音及び韻律的特徴についての考察。地域差, 世代差, 場面差について文を疑問詞, 述部の叙述部, 陳述部, 文全体のイントネーション, 文末のイントネーションの各要素に分けて分析・考察した。

### 0) はじめに

本稿は94年春から98年春にかけて福岡県域の鉄道沿線でおこなった方言グロットグラム調査の結果の一部についての考察である。山口県の下関と熊本県の荒尾を含む15の駅周辺で4世代の“はえぬき”の男女各一名に面接調査を行った。利用者の流れを考慮して門司博多間は九州旅客鉄道線沿い, 二日市大牟田間は西日本鉄道線沿いの各駅周辺生まれの, 両親のうち少なくとも一方も同地生まれの方を話者の条件とした。また, 駅周辺といっても古くから形成されている地域を選んだ。

本調査の目的は次の諸点である。

- (1) 人・物・情報の流れの動脈である鉄道沿線の新しい言語変化の動態を求める。
- (2) 山陽から豊前, 筑前, 筑後を貫き肥後に至る旧方言域の保守力を探る。
- (3) 小倉, 博多, 久留米, 柳川といった地方中核都市方言の周辺への影響力を計る。

高年層65歳前後, 中年層45歳前後, 青年層25歳前後, 少年層15歳前後。調査項目は, 語彙, 文法, 表現法, 音声・音調・方言敬語, 意識の分野からなり100項目程度である。少年層なら30分以内, 高年層でも1時間はかからない。選択枝方式で回答を求めた。調査参加者は以下の通り。

有元光彦, 池田裕子, 内山智美, 占部匡美, 江口儀彦, 久保田(荻野)千砂子, 小田佳代子, 白石祐子, 陣内正敬, 杉村孝夫, 二階堂整, 松尾真由美, 村上敬一

福岡県域グロットグラム調査についての詳細は杉村(1997) 二階堂(1997) 等参照。調査結果の全資料は二階堂・他(1998)『福岡県グロットグラム調査報告』で報告。

### 0.1) 考察対象項目

質問項目はc. 音声・音調・方言敬語のうち

2. 次の文を友人に言う場合と先生に言う場合の2種類で言ってみてください。
- a. 『どこへ行っているのか』
- 1) 友人へ      2) 先生へ
- b. 『雨が降っているから、傘をもって行きなさい』
- 1) 友人へ      2) 先生へ

このうち、本稿ではa.に対する回答を取りあげる。実際の面接調査では、「道でばったり親しい友人と出会ったとき『どこへ行っているのか』と声をかけるとき、どう言いますか」、「では、それが先生の場合だったらどうですか」と、場面を補って質問している。

本項目の設定意図は

- 1) 疑問詞疑問文のイントネーションの地域差・世代差
  - 2) 友人と先生という2つの対人場面における待遇表現の地域差・世代差
- を明らかにすることにある。待遇表現の中に「～してある」という共通語意識の強い方言敬語があらわれることがある。これについては質問項目c.3.

3. 前の質問2aで、先生に対して言うとき「どこに行っておりですか」とか「どこへ行ってあるとですか」などと言うことはありますか。
1. ある      2. ない      3. わからない

が用意されており、使用の有無について確認をしている。これについては後ほど取り上げる。

質問項目に対する下関～荒尾までの4世代男女の回答を要素に分けて

- 1) 分節音の言語形式上の特徴
  - 2) 韻律的特徴
- の2面について分析をおこなう。

## A 分析の概観

まず、各要素の特徴・機能と分布について予想されることをあらまし述べる。

### A.1)分節音

#### A.1.1)疑問詞

①DOKOと②DOCIRAの2つの形式があらわれる。疑問詞①DOKOと②DOCIRAが対人に対して使い分けられている場合待遇差をあらわす。

#### A.1.2)述部

##### A.1.2.1)移動動詞「行く」の部分

大きくは①IK-（行く）②ODEKAKE+DES-（おでかけです）の2つの形式があらわれる。「行っているのか」の「行く」に当たる部分を移動動詞「行く」であらわすか（①の場合、種々の敬意をあらわす派生接辞の添加もおこなわれる）、外出の意の名詞「お出かけ」+断定辞DES-であらわすかが対人によって使い分けられている場合、待遇差を表す。方言敬語を用いるか共通語の敬語を用いるかまたは、中間方言形（後述；例えばイッテアル）で表すかは方言志向／標準語志向の意識差を表す。

## A.1.2.2) アスペクト

①JOR-U/TOR-U(CJOR-U) (よる／とる (ちよる)) ②TE-I-RU (ている) ③Ø (非アスペクト形式)

「行っているのか」の「ている」に当たる部分を動作継続をあらわすアスペクト形式で表すか、非アスペクト形式(イクンデスカ等)で表すか。アスペクト形式で表す場合でも伝統方言形のイキヨルで表すか、標準語翻訳形(ネオーダイアレクト 真田1987,1990, 中間方言形タイプ(1)発生の土台は方言、共通語の当てはめ、陣内1995)「テイル(イッテルンデスカ等)」で表すかは、方言志向／標準語志向の意識差を表す。

近畿中央部を中心として東側には局所的に(注1)、西側には兵庫県以西沖縄県までの広域にヨル／トル対立があるところ(注2)、ヨル領域をトル(チョル)が侵しつつあるというヨル／トル対立統合の変化傾向がある。その結果、動作の継続においてトルがあらわれることもある。この場合、ヨルであらわれるかトルであらわれるかはアスペクト形式の地域差・年代差を表す。

注1 ; 三重県南部にはヨル／トル対立があり、場所によっては一世代前まであったが、現在は失われた所もある。また、三重県北部では、近畿中央部と同様トルに統合している。九州方言研究会(1998,7)での岸江信介氏の発言や日本のことばシリーズ『三重県のことば』参照。

注2 ; 首里方言ではフトーン(降っている:進行相)、フteen(降ってある:結果相)で区別を表すが、宮古では、進行と状態の区別が無く、着物を着ている最中も、着た状態もキウシウイウ[k'iʃiu'i] (着ている)で表す。平山・他編(1992) p.305,312

## A.1.2.3) (疑問を表す) 文末助詞

①KA②N (の, ん) ③NKA④TOYA (のか)

以上のいずれがあらわれるかは、地域差を表す。

## A.2) 韻律的特徴

## A.2.1) 文全体のイントネーション

これには「久保(1989)のアクセント消去規則」の有無がかかわる。

①有り②無し

福岡市方言では、疑問詞からそのスコープの終わりまでが、ひとつの音韻句を形成する。そして、その形成された音韻句に、無標の(unmarkedな)音調が付与される。つまり、疑問詞からスコープの終わりまで下がり目が消えて高く平らなピッチが続く。例えば、ド<sup>↑</sup>コ(どこ) + イ<sup>↑</sup>ク(行く) > イ<sup>↑</sup>キヨ<sup>↑</sup>ー(行きつつある) + トヤ(のか)はド<sup>↑</sup>「コイキョートヤのように疑問詞で上昇すると文末まで高く平らなピッチが続く。

この規則の有無は地域差を示す。

## A.2.2) 文末のピッチ変化

①上昇②平板③下降

これらの変化は質問意図の強調／非強調、丁寧さ／親疎などによる。

## B 分析

## B.1.1)疑問詞「どこへ」

## B.1.1.1)地域差

対友達場面では「ドコ」を基調として、「ドコニ」「ドコエ」が、特に地域差を見せずに分布する。強いて分布性をもとめるなら、久留米の「ドケー」、柳川・大牟田・荒尾の中高年層に見られる「ドコサン」の分布である。

## B.1.1.2)場面比較

対先生場面では「ドチラ」が特に青年層より上の世代で多数あらわれる。また、対友達場面で多くあらわれた方向を示す助詞無しの「ドコ」が減り、「ドコニ」が増える。これは、「ドコ」のぞんざいさに対して、「ドコニ」が丁寧さにおいて一ランク上であることを示している。

なお、対先生場面であっても、自己と想定する先生との親疎関係により待遇関係は変わり、用いられる疑問詞も異なる。対先生場面で「ドコ」が用いられるのは、親しみのあらわれである。

## B.1.1.3)方向助詞

博多方言では方向をあらわす「サイ」「イ」が用いられるが、あらわれていない。『方言文法全国地図』などでは「サイ」が報告されている(注3)。

なお、門司に見られる「ドコカ」は、不定詞であり、質問文とは対応しない。

注3；国立国語研究所『方言文法全国地図』1，第19図 東の方へ行け

なお、博多高男の調査を担当した中村萬里氏の調査表の記録を見ると ドコイキョート「ヤ」のように方向助詞「イ」が記されている。筆者はテープにより ドコイキョート「ヤ」と記録したが本来は「イ」があり、次の語頭の「イ」と融合して聞き取れなかったものと思われる。

図1 「どこへ」→友達

高年	○○	▲×	○○ △	△○	△△	△○	○○	○△	○○	○○	▲△	○○	※※	△○	※※
中年	△○ ▲	▲×	△○ △	○△	▲△	○○	▲▲	○▲	○○	○○	△○	◆○	○※	※△	▲▲
青年	▲○	○△	○△	○○	○○	○△	△△	○○	○○	○△	▲○	△△	○○	△○	▲○
少年	○△	○○	○▲ ▲	○▲	○○	△▲	○○	○△	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地 点	下 関	門 司	小 倉	折 尾	遠 賀	東 郷	古 賀	香 椎	博 多	二 日 市	小 郡	久 留 米	柳 川	大 牟 田	荒 尾

○ドコ △ドコニ ▲ドコエ ◆ドケー ※ドコサン ■ドチラエ ×ドコカ

注) 久留米のYM(青年男子)の△(ドコニ)は「ドコン」

図2 「どこへ」→先生

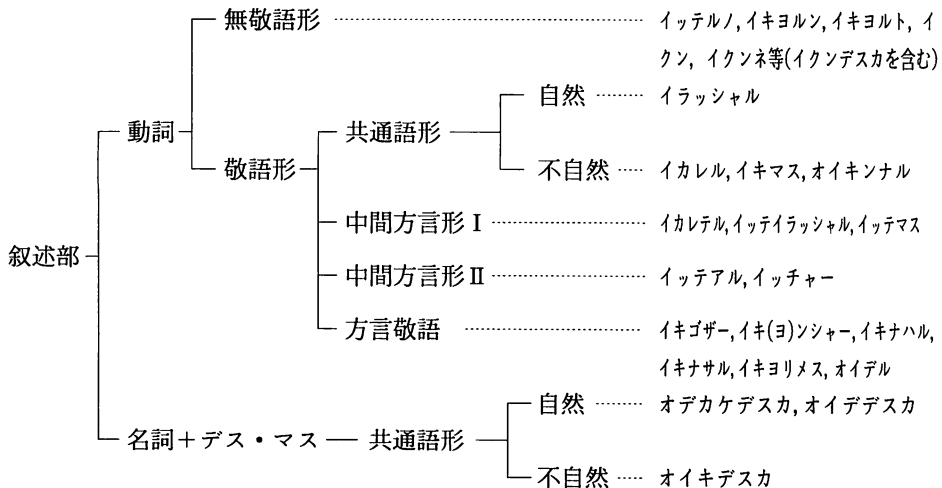
高年	==	=×	==	△=	△=	△=	=○	○△	○△	○○	△△	△=	※※	△=	△△
中年	△△ ▲	○×	△=	△△ ○	=▲	○=	○=	○▲	○△	○=	△△	◆▲	○△ =	△=	△△
青年	=△	○△	○○ △	○▲	○=	○△	=△	○△	○=	△△	=△	=△	○=	△○	▲▲
少年	○▲	=○	○△	○▲	○○	△△	○○	△△	△△	○▲	△△	○▲ ○	○○	○○	▲○
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

○ドコ △ドコニ ▲ドコエ ◆ドケー ※ドコサン ==ドチラエ ×ドコカ

注) 東郷OF(高年女性)の== (ドチラへ)は「ドチラホーメン」  
久留米OM(高年男性)の△ (ドコニ)は「ドコン」

#### B.1.2.1)「行く」(待遇表現を含む)

「どこへ行くのか」の「行くのか」に当たる部分の回答を整理すると、下表のようになる。まず「行く」の部分は叙述部であり「のか」に当たる陳述部と区別する。「イクンデスカ」のような動詞語幹IK-を採用するか「オデカケデスカ」のような名詞+断定辞デスを採用するかで大きく2つに分かれる。



名詞を採用すると形式はほとんど「オデカケデスカ」に決まる。これは、図3・4に見られるように、対先生場面にしかあらわれない。ただし、一地点だけ、東郷の高年女

性に「オイキデスカ」があらわれる。

動詞を採用する場合、敬語、共通語と方言、中間方言形が関与し、バリエーションは多岐に渡る。

はじめに、叙述部で敬語形式を用いないか敬語形を用いるかの2つに分かれる。無敬語形はイクン、イクンネ、イッテルノ、イキヨルン、イキヨルトのような陳述部まで敬語形のあらわれないもの（これは、主として対友達場面であらわれる）、イクンデスカのように陳述部で敬語形（丁寧形）があらわれるもの（対先生場面であらわれる）を含む。図では丁寧形を別記号とした。

敬語形には、共通語形から方言形、その中間段階のものまであり、ここにバリエーションの源泉がある。

自然な共通語形ではイラッシャルが用いられる。

イカレル、イキマスカ、オイキンナルは、共通語としては不自然であろう。

方言敬語としてはイキゴザー、イキナハルトデスカ、イキヨナサルトデスカなどがあらわれ、筑前圏のゴザー、筑後圏のナハル、柳川方言圏に特徴的なメスのように地域差をあらわす。

中間方言形Ⅰは共通語形としてあらわれたイラッシャルとアスペクト形式を組み合わせたイッテイラッシャル、不自然な共通語形のイカレルとアスペクト形式テイルを組み合わせたイカレテルのように（注4）もともと方言アスペクト＋方言敬語（例えばイキヨナハル）で表していたものをヨル＞テイル、ナハル＞イラッシャルのように共通語形に取り替えて表したものである。

中間方言形Ⅱは「イッテアル」とその縮約形「イッチャー」である。「(方言と) 気づきにくい方言」の「方言敬語表現で、改まった場面でも使える」ものとして『福岡県のことば』の「地方共通語」の項で陣内氏が言及している（注5）。福岡県内の広域において用いられ、会議などの改まった場面でも使える気づきにくい方言である。

この形式にたいする意識は人により異なる。方言と気づいていない人にとっては、やや丁寧規則的なだけに便利な「おとな」の共通語だと意識している（少年層にはあらわれない）。方言と気づいている人にとっては、やや丁寧なしかし、従来の方言敬語とは異なるが、いろいろな場面で使える便利な方言形だと意識している。「気づきにくい」とはうまく言っている。

縮約形「イッチャー」になると軽い丁寧さしか表さず友人に対しても用いられる。

注4；西日本新聞に「久方ぶり帰国混乱に戸惑う」と題した福岡市在住の76才女性性の投書が掲載された（1998年4月26日）。30年ぶりに帰国して敬語“らしい”ものに面食らっているという主旨のもので、「いかれる」が取り上げられている。デパートの店員から「まっすぐ行かれて、左に曲がられてください」と売り場の方向を教えられ、「いかれる」という言葉は「その昔頭がおかしいことだった」ので「ふきだしそうになってしまった」という。

なお、日高(1996)は、「される」にさらに「てください」の続いた「されてください」の使用が九州で特に盛んであると報告している。

注5；陣内正敬1997

図3 「行く（のか）」→友達

高年	〇〇	〇▲	〇〇	〇〇	〇〇	〇#	〇〇	〇〇	〇〇 ×	〇◎	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
中年	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
青年	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇▼	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
少年	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

〇無敬語（侍等） ▲イカレル ▼イキマス ×イッチャー ◎イキンシャー #イキゴザー

図4 「行く（のか）」→先生

高年	△	◆=	▲△	▲=	▲=	◇≡	▲◇	#※	○※ ※	#※	◇↓	※=	★★	▲=	↓◇
中年	▲=	△	△	▲◆	◆◇	△◇	◎=	△	◎※	◎=	※◇	↓◇	↓≡	◆※	↓△
青年	▲△	△△	△△	◆◇	△△	△△	◆▲	△△	△△	△△	△△	△△	↑=	△△	◇△
少年	△▼	△△	△△	△■	△△	△△	△△	△△	△△	△△	△△	△△	△△	△△	△△
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

〇無敬語（侍等） △イッテルデスカ、イキョートデスカ等 △イラッシャル ▲イカレル  
 ◆イカレテル ▼イキマス ■オイキンナル ≡オイキデスカ ◇イッテ（イ）ラッシャル  
 ※イッテアル ×イッチャー ◎イキヨンシャー #イキゴザー ↑イキナサル ↓イキナハル  
 ★イキメス ≡オデカケデスカ  
 注）久留米高男×「イッチャッデスカ」とも

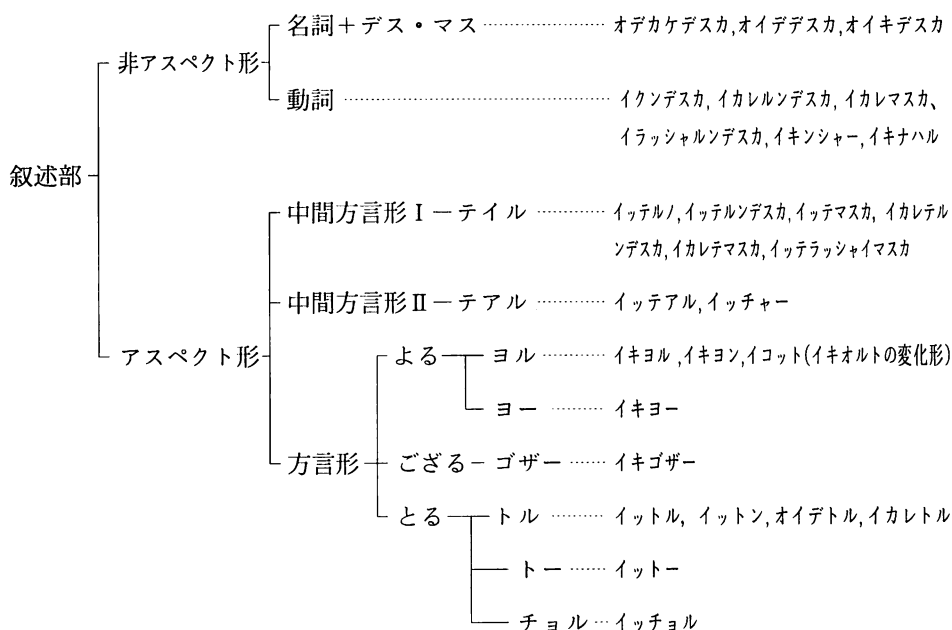
## B.1.2.2) アスペクト、

アスペクトとテンスに関しては次のような体系的とらえ方が一般的である（注6）。

注6；工藤（1995）参照

アスペクト テンス	アスペクト	
	完成相	継続相
非 過 去	スル	シテイル
過 去	シタ	シテイタ

これをふまえて、「行く（のか）」に当たる部分の回答をアスペクトに関する諸形式に的をしばって整理すると、下表ようになる。



## B.1.2.2.1) 概観

非アスペクト形は、名詞を用いる場合と、動詞を用い、「行く」に敬語を添加したり、陳述を表す諸形式を後続させるが、アスペクト形式はとらないものである。前者は対先生場面にしか用いられない。後者も対先生場面において、より多く用いられる。

「アスペクト形の共通語」は存在しない。

中間方言形にはⅠシテイルとⅡシテアルがある。シテイルにはバリエーションも多く、対先生場面の少年層で最もさかんである。同場面では青・中・高年層になるにつれ減少するが最多の形式である。対友達場面でも高年層に散見する。

シテアルは、前述したように対先生場面で用いられる「大人の」中間方言形と言ってよいだろう。

以上、中間方言形は丁寧な対人場面で多く用いられる。

図5 「行く（のか）(aspect)」→友達

高年	×●	*○	◇○	◇*	●●	◇#	◇*	*◇	* 〒 *	*#	◇〒	◇◇	◇◇	○●	※◇
中年	◇◇ ○	〒○ ※	◇◇	*◇ ◇	**	*◇	**	*○	**	** ◇	◇◇	◇◇	◇※	◇◇	◇◇
青年	◇◇	◇◇	◇◇	◇*	** ◇	*〒	**	**	**	**	*●	◇◇	◇*	◇◇	◇◇
少年	××	◇○	◇○	◇◇	**	〒*	**	*〒	**	〒〒	※*	◇◇	※◇	◇◇	※◇
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

○非アス<sup>ハ</sup>外形（イクデ<sup>ス</sup>カ、イクルデ<sup>ス</sup>カ、イク、イクル<sup>ス</sup>カ等） ●イッテル ◇ヨル（含イット） \*ヨー

※トル 〒トー ×チヨル #イキゴザー ■オイデデスカ等

（注） 荒尾のOM（高年男性）の※（トル）は、「イットッタ」と言う文脈であらわれたもの。

図6 「行く（のか）(aspect)」→先生

高年	●○	※=	○○	○=	○=	●=	#▲	*▲ ▲	*▲ ▲	#▲	●#	▲=	◇◇	○=	○●
中年	○=	※○	●=	○●	※●	*●	*○	◇▲	◇▲	◇=	▲●	◇●	◇※ ●	●▲	◇○
青年	○○	●●	○● ◇	●●	◇○	●●	●●	*○	*○	●○ ▲	=●	●▲	◇=	●●	●●
少年	●●	○○	●○	●○	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●● ○	●●	◇●	◇●	●●
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

○非アス<sup>ハ</sup>外形（イクデ<sup>ス</sup>カ、イクルデ<sup>ス</sup>カ、イク、イクル<sup>ス</sup>カ等） ●イッテル、イッテラシヤル等 ◇ヨル \*ヨー

※トル 〒トー ◎ #イキゴザー ■オイデデスカ等 ▲ イッテアル

#### B.1.2.2.2) 方言形6態とその分布

質問文に見られるように「どこへ行っているのか」と言う場合を、場面を想定して、日常語に翻訳してもらうのであるから、イキヨル（ヨー）があらわれることが予想され

るわけであるが、これに当たる形式は、表に見られるように、その他のイットル（トー）、イッチョル及びイキゴザーを含め3種6形式を数える。ゴザーはゴザルすなわち「ある」の丁寧形であるからそこに動作の継続の状態を示すものと考えてここに入れた。

新しい変化は、従来継続か完了かで使い分けられていたヨル（ヨー）領域にトル（トー）・チョルが侵入してきたという点にある。「とる」系の分布のみ抜きだして図示すれば、図7、8の通りである。

対友達場面で17例（うちイットル類6、イットー類8、イッチョル類3）、対先生場面で4例（すべてイットル類）があらわれる。

具体的形式と地点・話者を示す。

対友達場面	イッチョル類（3）	下関高男	ド「コ イッチョ」ルンカ
		下関少男	ド「コ イッチョ」ン
		下関少女	ド「コニ イッチョ」ン
	イットル類（6）	門司中男	ド「コエ イッ「ト」ンカ
		小郡少男	ド「コ」イットルトー
		柳川中女	ド「コサ」ン 「イットルネー
		柳川少男	ド「コ」イットル「ト
		荒尾高男	ド「コサ」ン イッ「ト」ッタツカイ
		荒尾少男	ド「コ イッ「ト」ル「ト
	イットー類（8）	門司中男	ド「コエ イットー「ン
		東郷青女	ド「コニ イットー「トー
		東郷少男	ド「コニ イットー「ー
		香椎少女	ド「コニ イットー「トー
		博多高女	ド「コ イットー「ト「カイ「ナ
		二日市少男	ド「コ イットー「ト「ー
		二日市少女	ド「コ イットー「ト「ー
		小郡高女*	ドコニ イットー「トー（音調記録もれ）
対先生場面	イットル類（4）	門司高男	ド「チ「ラエ イ「カレトリマ「スカ↗
		門司中男	ド「コ イッ「ト「ンデス「カ
		遠賀中男	ド「チ「ラエ イ「カレトリマ「スカ↗
		柳川中女	ド「コニ オイデト「ルデスカー

対友達場面において数も種類も多くあらわれる。また、世代では、少年層が9名と、最も多く、高年層の4名、中年層の2名、青年層の1名である。社会に未参加または一歩退いた世代から活躍層への順で広がろうとしているようだ。すなわち、社会的規範から自由な層から、社会に接する機会も多く、マスコミに敏感に反応し、それだけにある種の規範に縛られている層へという順序と考えられる。

福岡市の青年男子に該当する学生に「トル」と「ヨル」の違いについて内省を求めたところ、動作の継続中を表す場合でも「トル」は第三者の行為描写、「ヨル」は対者の行為の描写であるとして次のような例文の提示をうけた。

「アイツ ド「コ イットー「ト「カイナ（あいつどこへ行くのかな）  
オ「マ「エ ド「コイキョートヤ（おまえ、どこへ行くんだ）

この青年は「トル」を対者場面で用いるのは不自然であるという。

調査結果の回答を検討してみると、博多高女の「ド「コ イットート カ」イ「ナ」の「カイ」には「疑い」の意があり、青年の内省と一致しそうである。また、荒尾の高男の「ド「コサ」ン イッ「ト」ッタツカイ」は過去形になっており、過去の状態を表す「イットッタ」が用いられたのではないかと考えられる。しかし、その他は、対者の動作の継続を表したものであり、先述のように「ヨル」領域に「トル」が侵入したものだ考える。

なお、小郡の青年女子学生（大学院生）に、内省を求めたところ、対者場面はむろん、第三者の行為描写でも動作継続を表すのは「ヨル」であり、「トル」は使えないという。「トル」の侵入がより抑制されている状態であろう。

図7 「行ットル系 (aspect)」→友達

高 年	×								〒		〒				※
中 年		〒 ※											※		
青 年						〒									
少 年	×	×				〒		〒		〒	〒	※		※	※
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地 点	下 関	門 司	小 倉	折 尾	遠 賀	東 郷	古 賀	香 椎	博 多	二 日 市	小 郡	久 留 米	柳 川	大 牟 田	荒 尾

※トル 〒トー ×チヨル

(注) 荒尾のOM(高年男性)の※(トル)は、「イットッタ」と言う文脈であらわれたもの。

図8 「行ットル系 (aspect)」→先生

高 年		※													
中 年		※			※								※		
青 年															
少 年															
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地 点	下 関	門 司	小 倉	折 尾	遠 賀	東 郷	古 賀	香 椎	博 多	二 日 市	小 郡	久 留 米	柳 川	大 牟 田	荒 尾

※トル

## B.1.2.3)「(行く)のか」(文末助詞)

分節音の分析もいよいよ末尾近くなった。陳述部の「行く(のか)」の「のか」に当たる部分の回答を整理すると次のような諸形式が得られる。

(デス、マス、ノ、ン、ト、カイ、ト) カ、  
 カイ  
 ト  
 カイ・トナ  
 ナイ  
 (カン・ト) ネ  
 ノ1  
 ン  
 (ト) ノ2  
 トヤ  
 (ト) ロ

文末助詞は「カ」以下「ロ」までの11種あり、前接の諸形式がある。( ) 付はあらわれる場合とあらわれない場合のあることを示す。

ノ1とノ2は、音形は同じであるが、次の文に見られるように意味が異なる。ノ1は、  
 下関高女→友達 ド「コ イッテ<sup>レ</sup>ルノ

のように、共通語の形式名詞「ノ」の文末助詞化したものと同じである。ノ2は、  
 小郡高男→友達 ド「コ<sup>レ</sup>エ イキヨンノ<sup>レ</sup> (ノ<sup>レ</sup>は低からの下降調を示す。)

小郡高男→友達 カ「サ モッテイカンノ (傘をもって行かないか)

久留米中男→友達 ド「ケー イキヨンノ

久留米中男→友達 ド「ケ イキヨットノ

のように、「ネ、ナ」などと同様ナ行音感声文末助詞である。

対先生場面ではイキヨンデスカ、イッテルンデスカ、イカレマスカ、オデカケデスカ等ほぼ全域、全世代で「〜カ」を用いる。一方、対友達場面では地域差世代差、男女差が見られる。

## B.1.2.3.1) ン対ト対カイ・ナイ・ノ2の分布

下関と北九州市域(門司・小倉・折尾)は、「ン」を用いる。遠賀の3世代女性、東郷の中年女性は「ン」を取り入れている(男女差の反映)。具体形式の典型例は ド「コ イキヨ<sup>レ</sup>ン(小倉中女)である。

遠賀から二日市までは「ト」を用いる。ただし、博多はさらに「ヤ」を添加する点特異である。男性に特徴的(男女差)。外延地では、北九州市の折尾に「ト」の残存がみられる。折尾は、現在の行政区画は小倉を市政中心とする北九州市域であるが、方言区画を反映する旧国郡の区画では筑前域である。

小郡から荒尾まででも、特に少・青年層では(年代差)「ト」をさかんに用いる。

「カイ・ナイ・ノ2」の分布は、小郡から荒尾までである(注7)。高・中年層でのみあらわれる。

注7; 松石(1985)では、「カイ」がイ格文末詞として他の文末詞とともに体系的に示されている。

## B.1.2.3.2) ヤ・ネ・カ・ナの添加

中・高年層は「ヤ、ネ、カ、ナ」などを添加する傾向がみられる。

イキヨー

イキヨート

イキヨートヤ

の順に、即ち、何らかの要素を添加するたびに丁寧さが増すと考えられるが、「ト」の後にさらに文末助詞を添加する回答の分布は、「年代の高まりとともに丁寧な表現をする」ということも言えそうである。

当地域では「ネ」もあらわれるが、これは、他地域にも散在する。

以上、文末助詞の分布は本グロットグラム調査における下関～折尾、遠賀～二日市、小郡～荒尾という3地域の地域差をあらためて浮き立たせている。

図9 「(行く)のか」(文末助詞)→友達

高年	○※	○○	≡≡	○*	○*	◆○	∩◆	◆◆	∩△	◆◆ ○	※◆	≡◆	○≡	◆◆	◎≡
中年	**	**	○* *	◆* *	○◆	∩*	≡◆	◆◆	∩◆	≡◆	◆◆	※≡ ℳ	▲≡ ◎	◎≡	≡◆
青年	○*	**	**	○◆ *	◆* ◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆○	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆
少年	**	**	*≡ *	**	◆*	ℳ◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

○カ ◎カイ △ナ ▲ナイ ◆ト (一) ×ノ1 \*ン ※ノ2 ≡ネ ∩ヤ ≡ロー  
ℳ文末助詞なし

(注) 二日市の高男は、「ヤ」、「ネ」とも。

図10 「(行く)のか」(文末助詞)→先生

高年	○○	○○	○○	○○	○○	○◆	○○	○○	△○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
中年	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
青年	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
少年	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	◆○	○○	○○	○○
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

○カ ◆ト △ナ

## B.2.1) 文全体のイントネーション

文全体の抑揚についてパターンを整理すると、次のようになる。

タイプ1.1 疑問詞 ド「コ で下降し、そのまま文末まで低が続くタイプ（注8）。模式的に示せば、図11のようになる。例としては、

小倉青女 ド「コニ イットーン\*（ただし、\*印は陣内(1993)を資料とする）

二日市少男 ド「コ イッテル「ンデスカ

このタイプの変異として文末上昇するものがある（模式図12）。次のような例がある。

門司中男 ド「コエ イットー「ン

門司中女 ド「コニ オデカケデス「カ

小倉高女 ド「チラエ イラッシャイマス「カ

二日市青女 ド「コニ イク「ンデスカ「ー

タイプ1.2 疑問詞 ド「コ で下降するが、動詞「行く」の部分で再び上昇、下降する（模式図13）。例は、

小倉少男 ド「コ イ「キ「ヨン

小倉少女 ド「コエ イ「ク「ンネ

これにも文末上昇の変異タイプがある（模式図14）。例は、

門司高女 ド「コカ オ「デカケデ「スカ↗

門司高女 ド「コカ イ「カレル「ンデス「カ

門司中女 ド「コカ イ「ク「ン↗

タイプ1.3 疑問詞が低→高→低となるもの。

1.3.aは、文末は別として、述部での上昇がないもの（模式図15）。例、

遠賀高女 ド「コニ「 イッテル「ン

古賀高男 ド「チラ「エ イカレマス「カ

1.3.bは、疑問詞で一度、上昇、下降し、述部でもう一度上昇、下降するもの（模式図16）。例、

門司高男 ド「チ「ラエ イ「カレトリマ「スカ↗

図11

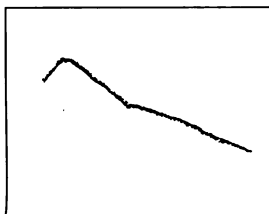


図12

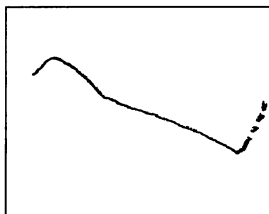


図13

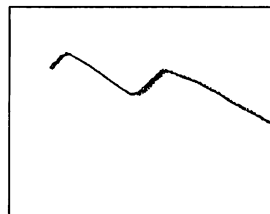


図14

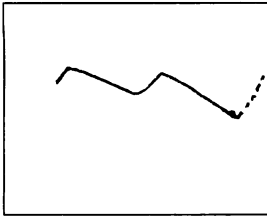


図15

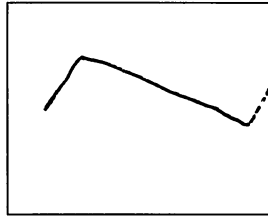
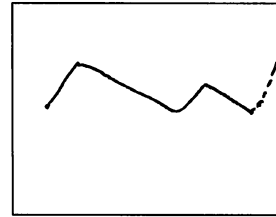


図16



注8；疑問詞ドコが頭高で下降のピッチを示す例は、門司や小倉などに散見するが、かなり共通語的発話とみられる。

小倉北区青年女子に該当する学生に内省を求めたところ、

→友達 ド「コ イキ」ョン

→先生 ド「コ イキヨ」ルンデスカ

のように上昇、下降を一度行う後述、タイプ2であった。

タイプ2 疑問詞は ド「コ となり、文頭の低から上昇、動詞「行く」の部分で下降する。

一回だけ上昇と下降が起こるので模式図は図17のようになる。例は、

門司青男 ド「コ イキヨ」ン<ピッチ抽出図18>

小倉高女 ド「コ イク」ンネ↘(ネ↘は低からさらに下降することを示す。)

文末上昇の変異タイプは模式図19、

下関中男 ド「コニ イキヨ」ルン↗

また、「行く」の上昇が目立つ変異タイプもある。

下関中女 ド「コ イ「キヨ」ルン

門司青女 ド「コニ イ「キ」ョン<ピッチ抽出図20>

図17

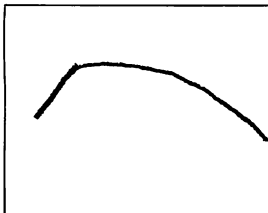


図18

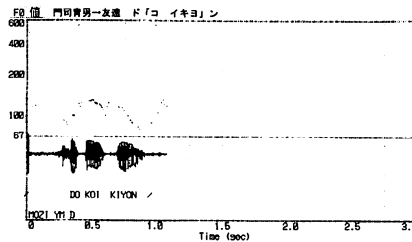


図19

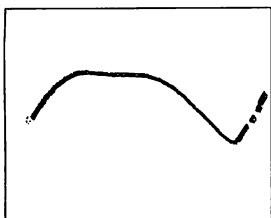
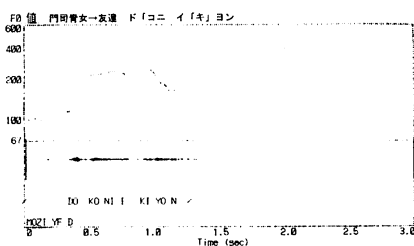


図20



タイプ 3 久保(1989)の規則が当てはまるタイプ。疑問詞からスコープの終わりまで下がり目が消えて、高く平らなピッチが続く。模式図は図21のようになる。例は、

博多青女 ド「コ イキヨート<ピッチ抽出図22>

文末上昇の変異タイプは模式図23。

博多少女 ド「コ イキヨートー<sup>↑</sup> (ト<sup>↑</sup>は、高からさらに上昇することを示す。) <ピッチ抽出図24参照>

博多青女 ド「コ イキヨートー<ピッチ抽出図24>

図21

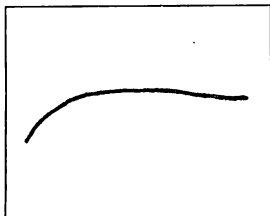


図22

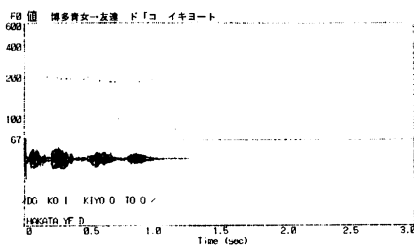


図23

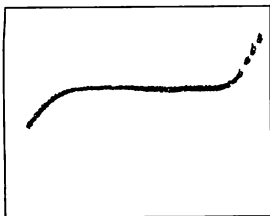
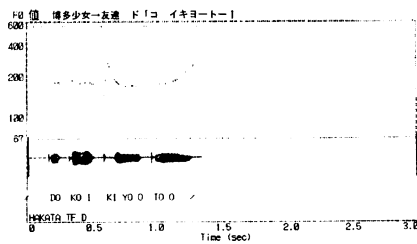


図24



#### B.2.1.1) 文全体のイントネーションの地域差・世代差と場面差

図25に見られるように、対友達場面ではおよそ東郷～小郡間にタイプ3がどの世代にも用いられている。

久留米～荒尾間の青・少年層にも浸透しつつあるようにみえる。これらの地点の中・

高年層は1.2や1.3のタイプ、即ち疑問詞で上昇・下降がみられるため文全体のイントネーションに抑揚がみられる。小郡～荒尾間は、これまでの単語アクセントの研究（平山1951, 奥村1990他）であきらかなように無型アクセントであることを考えあわせると、これらの地点ではイントネーションにおいてタイプ3（博多式）の平板なものを受け入れつつあるといえよう。小郡は他地点にくらべ早く受け入れたと考えられる。

一方下関～遠賀間（東京式単語アクセント地域）ではタイプ2の分布が目立つ。このタイプの特徴は疑問詞で上昇、述部で下降する点にあり、抑揚に富んでいる印象が強い。

遠賀と東郷はタイプ2（北九州式）とタイプ3（博多式）が混在する境界域である。通勤・買物・遊興などでもこれらの地点は福岡県の両中核都市への行き先が重なりつつ分岐するところである。

図26の対先生場面になると、タイプ2が全体的に分布するようになる（ただし、ひとり荒尾のみまったくあらわれず、大牟田も少年層以外にはあらわれない）。また、タイプ1（特に1.2）も増える。総じて述部で下降を有するタイプが増加するということがある。対友達場面では門司・小倉あたりに分布している共通語に近いイントネーションが対先生場面になると筑前から筑後域まで広く用いられていることがわかる。イントネーションも場面によって使い分けられていることを示す。

## B.2.2) 文末のイントネーション

図25・26においてタイプ2.1に分類したものを例示する。

折尾中男    ド「コニ    イカレルト」デス「カ  
遠賀高女    ド「チラニ    オ「デカケ」デスカ  
香椎高男    ド「コ    イ「キゴザート」デスカ  
博多青男    ド「コ    イキョート」デスカ  
久留米高男    ド「コニ    イッチャット」デスカ  
柳川青男    ド「コ    イキヨンナサルト」デスカ

「～ト」までは高が続くが次の「デス」に移るとき下降する。これは構文的制約によるものかと考えたが、同じ分節音で次のように文末まで高の続くタイプ3の例もあるので、下降するかしないかは任意である。

古賀青女    ド「コ    イキョートデスカ  
香椎中男    ド「コニ    イッテアットデス「カ  
二日市高女    ド「コ    イッテアルトデスカー

また、文末の助詞の直前まで高が続き文末の「ト、ヤ、カイナ」に移るとき下降する例もある。

折尾中男    ド「コ    イキヨー「ト  
博多高女    ド「コ    イッチャート「カイナ  
博多青男    ド「コ    イキョート「ヤ

これも、次のように文末まで高の続くタイプ3の例が多数ある。

古賀高男    ド「コ    イキヨルトヤ  
古賀高女    ド「コ    イキョート「ー  
博多少女    ド「コ    イキョート「  
二日市高女    ド「コ    イキンシャートー  
二日市中女    ド「コ    イキョートネー

博多青年男子・小郡青年女子福教大学生に文末の下降・上昇（平板）の心情的意味について内省を求めたところ、次のような説明を得た。

(1a) ド「コ イキョートデスカ

(1b) ド「コ イキョート」デスカ

文末まで高い(1a)は丁寧な言い方である。「ト」の後で下降する(1b)は親しみのある言い方であるが、「ひやかし」の気持ちを込めることもある。

(2a) ド「コ イキョートヤ

(2b) ド「コ イキョート」ヤ

(2c) ド「コ イキョート」ヤ

(2a)(2b)は、問い以外の特別な心情は無いが、(2c)は例えば相手がこちらの思い通りに反応しないのでいらいらしているときに用いると言う（以上博多青年男子）。

(3a) ド「コ イキョ ルト

(3b) ド「コ イキョ」ルト

(3c) ド「コ イキョルト

これらは対友達場面の言い方である。(3a)は他の2者に比べるとニュートラルであるが、(3b)(3c)のように文末上昇または文末まで高を持続させると丁寧な言い方になる。従って対先生場面になると

(3d) ド「コニ イ「カレテル」ンデスカ

のように述部を敬語形式にするだけでなく、文末上昇によっても丁寧さを表す（以上小郡青年女子）。

図25 「どこへ行くのか」(イントネーション)→友達

高年	※※	＝△	※※	※※	※※	＝＝ ※	＝＝	＝＝	＝×	＝＝	＝・	＝※	□□	◇＝	□□
中年	※※	○△	※※	×＝ ◇	＝□	＝※ △	＝＝	＝＝	＝＝	＝＝	＝＝	＝＝ ※	※◇	◇□	※△
青年	※※	※※	※○ △	※※	＝※	＝＝	＝＝	＝・	×＝	＝＝	＝※	・・	＝＝	＝＝	○＝
少年	※※	※※	△△	※※	＝※	※＝	＝＝	・＝	＝＝	＝＝	＝＝	※＝	＝＝	＝※	△◇
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地点	下関	門司	小倉	折尾	遠賀	東郷	古賀	香椎	博多	二日市	小郡	久留米	柳川	大牟田	荒尾

○タ17°1 △タ17°1.2 ◇タ17°1.3a □タ17°1.3b ※タ17°2 ×タ17°2.1 〰タ17°3 ・音調記録漏れ  
(注) 補足調査では、小倉青女は※、小郡高女は×、久留米青女は〰であった。

図26 「どこへ行くのか」(イントネーション)→先生

高 年	※※	□△	※○	＝○	※×	＝◇	□※	×※	＝※ ＝	※＝	＝・	×◇ ＝	◇・	＝◇	□□
中 年	※○ ＝	□△	※※	×＝	□※	＝△	＝※	＝※	＝※ ＝	＝△ △	＝※	※□	＝※ ＝	□□	△□
青 年	※※	※△	※△ ○	※△	※＝	※※	※※ △	※・	×※	△○ ※※	※□	※・	×△	○○ △	△△
少 年	※△	△※	△△	※△	△※	＝△	＝＝	・※	※※	○△	＝□ ※	※◇	＝※	※※ ○	△◇
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地 点	下 関	門 司	小 倉	折 尾	遠 賀	東 郷	古 賀	香 椎	博 多	二 日 市	小 郡	久 留 米	柳 川	大 牟 田	荒 尾

○タイ°1 △タイ°1.2 ◇タイ°1.3a □タイ°1.3b ※タイ°2 ×タイ°2.1 ＝タイ°3 ・音調記録漏れ  
 (注) 久留米高男は◇とも。補足調査では、小倉青女は※、小郡高女は＝、小郡青女は※、久留米青女は□であった。

### B.3) 中間方言敬語「～してある」

対先生場面で「どこへ行ってありますか」とか「どこへ行ってあるとですか」のように「～してある」という言い方を用いるかどうかを尋ねた項目の回答を整理すると図27のようになる。前者のように言うが後者のようには言わないや、久留米でイッテアット、イッテアッデスカ、イッチャットデスカという形式で言うも「ある」にしている。

博多高男や二日市高女は、質問C.2で ドコ イッテアリマスト (ナ)、ドコニ イッチャルトデスカと答えているのにこの質問C.3では「ない」と答えている。

#### B.3.1) 分布

「ある」の回答は小倉（一部）から大牟田の間に分布している。4世代男女8名全員が「ある」と答えたのは久留米である（注9）。ついで古賀の7名、東郷・二日市・柳川の6名が多く、香椎・博多など分布の中心部に位置するとみられる所がかえって少ない。使わない地点との境界に近い折尾・遠賀や大牟田では使用者が少ないところをみるとやはり使用の中心は筑前西部から筑後北部にかけてであろう。

注9；補足調査として青年女子2名にたずねたところ、用いることもなく、聞いたことがあるともいえないということであった。この2名は福岡教育大の学生で、福岡市やその周辺出身の学生ともつきあいがあるはずであるが、なぜであろう。

#### B.3.2) 翻訳式回答と使用意識

図27の使用意識と図4「～を何と言いますか」式の、場面を想定して日常語に翻訳してもらった文形式の回答で「イッテアル」「イッチャー」があらわれる場合を比較してみよう。

(1) 図4では、香椎から大牟田までの青年層以上にあられる。

(2) 図27では先述のように、小倉高女、折尾～大牟田までの広範囲でしかも古賀～柳川間では少年層においても使用するという回答である。B.1.2.1)では少年層にあられないことから<「おとな」の敬語だ>としたが、少年層でも場面や条件によっては用いることができると修正する必要がある。翻訳式回答の場合はいくつかある可能性の中からの一つまたは二つの言い方しか得られない。その点図27の「ある」の回答が使用の実態に近いだろう。また、翻訳式で「テアル」が3名にあられた博多、二日市、久留米と「ある」という回答の多寡の分布とにもある程度相関がみとめられる。

図27 「どこへ行ってありますか」(中間方言敬語)→先生

高 年	〇〇	〇〇	〇=	〇〇 =	〇〇	=	=	=	〇=	=〇	〇〇	=	=〇	=〇	〇〇
中 年	〇〇	〇〇	〇〇	=	=〇	=	=	=〇	=	=	=	=	=	=	〇〇
青 年	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇=	=	〇=	〇〇	〇〇	=	〇〇	=	=〇	=	〇〇
少 年	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	=	〇=	=〇	=〇	=	=	=	〇〇	〇〇
性	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
地 点	下 関	門 司	小 倉	折 尾	遠 賀	東 郷	古 賀	香 椎	博 多	二 日 市	小 郡	久 留 米	柳 川	大 牟 田	荒 尾

= ある    〇 ない

#### 4)おわりに

ひとまず全調査地点の音調項目の一つの分析を終える。

韻律的特徴に関しては、地域差を示すものと心情を表すものがあり、特に後者については多人数調査や聞き取り調査(知覚実験)など客観的資料により考察を進める必要がある。

音調項目のもう一つの分析が残った。

調査に協力していただいた話者の方々、また、お世話いただいた各地の方々に感謝します。また、調査者として手弁当で参加してくれた多数の方たちの努力なしに資料は集まらなかった。地点数として十分ではないが、調査期間も長くなったのでひとまず区切りをつけた形である。他の項目についても続けて考察を行いたい。

#### 参 考 文 献

奥村 三雄 1990『方言国語史研究』東京堂

1994九州方言『九州学を楽しむ』おうふう

久保 智之 1989福岡市方言の、グレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン『国語学』第156集

- 1996福岡市方言と朝鮮語慶尚南道方言に見える音調の類似と相違, 第147回筑紫国語学談話会資料
- 九州方言研究会編1997『西日本諸方言アスペクトの地域差に関する報告書』鹿児島大学
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 1998a西日本諸方言のアスペクト体系の記述をめぐって『日本語研究』18号  
東京都立大学
- 1998b西日本諸方言と一般アスペクト論『言語』VOL.27NO.7大修館
- 真田 信治 1987ことばの変化のダイナミズム——関西圏におけるneo-dialectについて  
『言語生活』429筑摩書房
- 1990『地域言語の社会学的研究』和泉書院
- 杉村 孝夫 1997福岡県域疑問文のイントネーション『福岡教育大学紀要』第46号第1分冊
- 陣内 正敬 1989北部九州の新方言『九州方言の史的研究』桜楓社
- 1996a『北部九州における方言新語研究』九州大学出版会
- 1996b『地域語の生態シリーズ, 地方中核都市方言の行方—九州』おうふう
- 1996c西日本方言の変容と関西方言『方言の現在』明治書院
- 1997『福岡県のことば』明治書院
- 陣内・有元・杉村・二階堂 1994北部九州グロットグラム調査の一報告『語研通信』3梅光  
女学院大学
- 中村 萬里 1997福岡市中年層のアクセント『筑紫女学園大学・短期大学国際文化研究所  
論叢』第8号
- 二階堂 整 1997福岡JR・西私鉄沿線グロットグラム調査『西日本におけるネオ方言の  
実態に関する調査研究』科研報告書
- 1998a福岡県グロットグラム調査報告『日本学報』17大阪大学文学部日本学  
研究室
- 1998b福岡・北九州の方言の動態『九州におけるネオ方言の実態』科研報告  
書
- 二階堂・他 1998『福岡県グロットグラム調査報告』福岡女学院短期大学
- 丹羽 一彌 1998予『三重県のことば』明治書院
- 日高貢一郎 1996「～されてください」考『日本語研究諸領域の視点』上巻, 明治書院
- 平山 輝男 1951『九州方言音調の研究』学界之指針社
- 平山輝男他編 1992『現代日本語方言大辞典』第1巻, 明治書院
- 松石安兵衛 1985『しっとり召すかんも柳川方言』柳川商工会議所